聖ヶ丘
第26号
2005・6・12発行
金光教教学研究所

現代社会問題と教学研究

第二部長　加藤実

平成一四年、各教団に付設されている研究機関が集い、人権、生命倫理などの様々な現代社会の問題に関わって、それぞれの立場から意見、情報を交換し、「教学」の可能性を拡げていくとの趣旨で、「教団付置研究所懇話会」が発足した。本所も発起人のメンバーとして当初から関わっている。去る四月、その付置懇において、生命倫理問題の研究部会が開催され、本所から私が参加した。この会合は、「脳死・臓器移植問題」に対して見解を持つ九教団から説明を聞き、意見交換するという内容であった。

各教団の見解は、概ね脳死を人の死とは認めがたい、慎重に判断すべきであるというものであった。神道系の教団からは、霊肉一体であり、ぬくもり、鼓動など身体の機能は、神の働きによって支えられており、脳という身体の一部の機能停止を以て、人の死と考えるべきではないとの意見があり、仏教系教団からは、脳死臓器移植の是非は教義に照らして判断できがたく、また臓器提供は「布施」として容認されるとの意見があった。多くは、教団中央が一定の方針を出すことによって、信徒の考えを縛りつけるとの理由から、社会的コンセンサスを得るまで慎重に対処すべきというトーンであり、明確に反対を表明し、具体的な行動に訴えている教団は少ない。教義に照らして、脳死を人の死とは認めがたいが、一方で移植技術によって助かる人がいるという事実が対応のむずかしさにつながっていると思われる。

この問題は、かつて本教においても、現代社会問題研究会で取り組まれたテーマであるが、一定の見解を出すまでには至っていない。本所には、現代社会問題に直接取り組むセクションはない。だからといって無関心なわけではない。提供する側も提供される側も、死に直面している。死生の安心を説く以上、どちらにも目を背けるわけにはいかない。そこには、脳死臓器移植に賛成とか反対とかには収まらない根の深い問題が横たわっている。それゆえ、この問題は様々な問題提起を教学研究にもたらしてくれる。死生観、御霊観にしても、本教にはどれほども議論の蓄積があるわけではない。身体をどこまで自らの意志で「処分」できるのか、との問いから派生する身体観の問題、あるいは神から与えられた「御霊」の働きとは何か、さらには葬儀において霊璽奉遷の行事を仕えるが、その儀礼の意味、そして助かりとは何かなど、神と人との関係の根本を問う教学的課題が山積していることに、各教団の見解を聞きながら改めて気づかされた。

しかし、現代社会問題に答えるために役立つ研究をするという姿勢では、科学技術、経済論理など現代社会の価値軸への対抗ばかりに目を奪われ、信仰が問うべき本質を見失うことになるだろう。今後も現代社会の問題に対して見解を示すことへの、内外からの迫りが高まってくることが予想される。しかしそれに直接答えを示すことよりも、ただただ神人関係の根源的解明に向けた議論を積み重ねていくことが、教会現場での対応の支えとなり、生命倫理の問題のみならず、あらゆる問題を考える上で、本教が社会に対する時に一番の強みとなるのではないかと思う。（広島・比和教会在籍）

本所では現在、このような研究と業務を計画しています！

〈教学研究の意義と今後の展望〉

今日、既存の価値体系の揺らぎが加速度的に進行していると実感される中で、改めてその状況を乗り越え得る信仰基盤の確立が喫緊の課題となっている。

本所では、昨年、設立五〇年を経て、より一層、社会や人間を信仰的に意味づける根底的視座を培うと共に、その課題意識を反映した新たな研究領域の開拓を展望していく要があるとの確認をしている。

そこで、本年度は、次の二点を研究的重点課題として掲げ、これまでの研究態度の見直しも伴わせて、一層の視点や方法の充実を図っていく。

①教祖伝刊行以後の教義的課題の明確化と究明

②信奉者の「助かり」を射程に収めた信心生活の実態把握

次に、具体的に取り組まれている研究の現状について紹介したい。

〈教祖・教義研究〉

天地金乃神と金神・日天四・月天四の関係及び、「神名」と「神性」の関係を、個々の神の働きが意味を持つとされる世界感覚や信仰感覚と切り結びつつ考察し、信仰において出会わされる神の実在性や体験の質を解明する。また、「参拝」「広前」など広く人々の実践を支える信仰内容や「辛抱」「楽しむ」といった感情が持つ意味、更に「理解」の言葉が人間を信仰の次元へ導く力動的な作用とその構造を追究する。これらを通して、「助かり」の契機や諸要件に重点を置いた信心の様相や、信心による「助かり」の内実究明を目指す。

〈教団史研究〉

人間が本教信仰に与り、また、それを伝えようとする情念や動機とは何か、といった信仰営為が成り立つ根本的事態を究明すべく、教師、信徒個々の生活の様相が窺われる記録に着目し、信仰が時代に与える固有の価値を明らかにすると共に、現代に向けて営むに価する信心の基盤の究明に培っていく。こうした究明と関わって、本教における「信心生活」「おかげ」「布教」「取次」等をはじめとする「救済」概念の見直しを図り、本教信仰の成立、展開の要件の歴史的明確化に取り組む。

〈その他〉

諸資料目録を統合した検索システムをベースに、「教団の資料センター」として、公開規準に基づいた態勢の充実化を図る。また、本年度は、研究生が２名採用された。これからの教学研究を担う新たな戦力が加わり、一層の研究の充実、展開が期待される。

三五年ぶりに教学講演会を開催

昨年一二月一二日、布教功労者報徳祭時に、本部広前会堂西二階において、教学講演会を開催した。同講演会の開催は三五年ぶりで、本所設立五〇周年を機に、紀要『金光教学』に発表された教学研究の成果を、執筆者が研究動機、問題関心を中心に紹介し、広く教内の信奉者と現代の信仰課題について共有していきたいとの願いのもとに開かれた。祭典日の午前中にあって、約八〇人の参加があった。

講演会では、所長挨拶に引き続き、まず小坂真弓所員が、「『生神金光大神』という祈り」と題し、先師の祈りの姿と自らの信仰体験を紹介しながら、「生神金光大神」という神号が、祈りの言葉となったのはなぜかとの疑問を提示した。そして、祈りの実践の大切さを強調し、「生神金光大神」という祈りによって、神が生まれ、神の言葉を聞くことができ、それを伝えることが可能になるという、祈りが生み出す神と人との関係構造について講演した。

次に、竹部弘所員が、「深遠なる神意―難儀の意味が明かされる時―」と題し、安政五年一二月二四日のお知らせで、金光大神前半生における「七墓築く」という難儀のわけが明かされる意味について述べ、そこから読み取れる人間の助かりの陰にある神の忍耐、苦労に思いを寄せて、神への畏れ慎みを改めて心すべきだと述べた。そして研究を通してお知らせに平伏する金光大神の姿が切実に迫ってきた、と語り、「群盲象をなでる」ということわざを例えにして、信心とは神の一部分であっても少しずつ分からせてもらう積み重ねが大切であると講演した。

参加者から、「祈りをもとにした信心生活の大切さを再認識した」「信心にとって、神への無礼とは何かを改めて考え直す必要性を感じた」などの感想が寄せられた。

提　言

「教学の裾野が広がるために」

研究員　水野照雄

教学の裾野がもっと広がらないだろうかと思う。もちろん、教学研究ということについては、その専門性は不可欠であり、ただ単にそれを知る人が増えればよいということにはならない。一定の学問的水準と信仰的真摯さを確保しつつの研究ということになれば、それは専従のスタッフによってようやくなされ得るほどのことであろう。その意味で、教学研究所は、ここでこのようにしかなし得ない教学研究がなされている場であり、その役割の大きさといえば他に比べるものがない。

しかし、反面、教学が研究所のみに閉じてしまってよいということにもならない。実際、教内的な教学研究への関心の低さには憂慮すべきものがあると感じる。そのために、主に紀要論文によって成果が発表されるのであるし、教学研究会などを通して教内外に開かれようとしているのであるが、ただ、その専門性ゆえに、どうしても難しさやとっつきにくさを伴う。ややもすると分かる人だけが分かる教学研究になってしまいかねない。教学ということが、そもそも本教信心がそれ自体求める信仰的な働きであるとすれば、「教学（研究）の全教化」が急務であろうし、「全教の教学化」に向かうべきだとも言えよう。

その素地はある。事が起こったときに、「問題にする」あるいは「問題になる」ということが日常会話としてかわされる世代がある。そのような態度が、自身の信仰に立ち返って問うことであるとすれば、教学しようとする働きとそれほど遠くはないだろう。ただ、ごく狭い限られた範囲での経験からの私見であり、どこまで一般化できるか定かではないが、その世代というのは、中・高年齢層と見受けられる。とはいえ、そのことは本教がかつて、より教学的であったことの証左でしかないのであろうか。

として、何ができるか。たとえば、成果となった論文について、書評のような形での論評と批判が、鮮度の高いうちに出されれば、より受け入れられやすいのではないだろうか。厳密で確実な検討がなされる要については言を俟たないが、一方で、敷居を低くするための試みがあってもよいだろう。ひとつの成果が研究となる以前の教学的な関心の卵にまで遡っての読み解きがなされれば、そのことの役に立つのではないだろうか。

そうしたときに求められるのは、教学研究が正しく教学研究であるということに他ならない働きだと思われる。研究所では、それぞれの研究の課題性、研究者の問題意識が厳しく問われる。そのことが現在の教学研究の水準を維持せしめているといえよう。それに加えて、教学研究として、何をどのように問題にしようとするのか、そのことが、もっと問われ、求められるのではないだろうか。

信心にとって、自らの中に、いわば醒めた部分を持ち続けることは、それが健やかであるためには欠かせない。まずは個人の信仰ということについて言えることであるし、教団ということで考えてもそうであろう。後者の場合に、それを担っているのが教学研究所であるとすれば、その独立性は、果たされるべき機能が求める必然である。信心が強くなるには、信心によって鍛えられることが必要であるし、またそれはそのことによってしかなし得ない。教学が金光教に対して負う役前はここにあるだろう。であればこそ、教学研究が研究所に閉じてしまうのでなく、教学としてその裾野を広げて行く全体的作用が求められよう。

（三重・松阪新町教会長）

平成１６年度研究報告

座談会

「教祖伝刊行と教学研究の今」

平成一六年度の研究報告検討会の全日程終了後、職員数名により座談会を実施した。以下その概要である。

参加者　加藤実、高橋昌之、秦修一、岩崎繁之、宮本和寿（司会）

（司会） 今日の座談会では、「教祖伝刊行と教学研究の今」というテーマの下、今年度の研究報告を題材に、教学研究が今、何に向かおうとしているのか、何を明らかにしようとしているのかをめぐって話し合って行きたいと思います。

そこで、今回の研究報告を振り返ってみますと、ユニークな着想や着目の多くが、このテーマとの関わりで見えてくることが特徴に挙げられます。こうした研究動向が現れてきている要因の一つには、一昨年に教祖伝が刊行され、改めて教祖の生涯が纏めて示されたことを契機に、研究ならではの関心や興味が湧くことになり、探究意欲に反映したと言えます。そして、その関心は「教祖伝」という舞台設定で予め想定される事柄とは異なったものへの着目を含みながら、より奥深いところでつながっており、しかも信仰の世界の創造的な開示を試みるものだということができようかと思います。

（岩崎） そのことで言えば、高橋さんは、「教祖の死」を、残された者がどのように経験したのかという問題について、いわば「教祖伝」とは異なる視点から「教祖」の意味を問うことを試みていると思います。

（高橋） 教祖伝が刊行されて、教祖を求める、頂くという基本的問題について考えてみないといけないと思い、このテーマに取り組みました。またそのことは、今日の「生き通しの生神金光大神」という教義的理念や信仰実感が成立する以前の場に立ち会い、そこから今日の理念を見直すことになると考えています。

（秦）「教祖の死」という容易に意味付けがしがたい、大きなテーマを考えていく中で「教祖の死を早馬神社の狐が鳴いて知らせた」というような伝承が取り上られていましたね。これは普通、荒唐無稽なこととして切り捨てられるような事柄ですが、しかし、そうした荒唐無稽で神秘的なやり方で、「教祖」の生を捉える視座を設けたという事実があるのであり、そこに「伝承」としての歴史を支えた人々の心意が見えてくることがあります。こうした「伝承」自体はすべてが事実とは言えないけれども、教祖への関心を呼びさまし続けることになり、客観的事実としての歴史叙述の手前にあって、過去の出来事への想像力を刺激している基点であったと言えそうです。

（高橋） 早馬神社の狐の話など、不思議な出来事は金光大神の死が特別であったからと解釈しがちですが、単にそれだけでは信仰的な意味を言い表したことにはならないと思いました。直信達が語った不思議な出来事は、直信一人一人の中では、金光大神からの働きかけとして受けとめられ、生前と同様に金光大神とつながっているという思いを強くさせ、また金光大神の永遠性を確認させたのではないかと考えました。それこそ、それまで依拠していた金光大神という人物の存在の有無、つまり金光大神の死を乗り越えさせるものだったのではないでしょうか。直信達は布教や教団組織化という苦難の道を手探りで求めていく中で、広前に座りきって祈り続ける金光大神に思いを寄せます。それは、金光大神生前の祈る姿を目の当たりにしている直信にとって、困難な状況にあって支えてくれる「教祖」として力強く甦ったのだと思います。

（司会） このことには、「教祖」の発見とも言えるような本教史的意味がありますね。岩崎さんは、金光大神が「先を楽しむ」という前向きな心持ちを説いていることに注目して、人が苦難に直面した時に、いかなる心境の転換によって救われるのかを考えようと研究を進めていますね。教祖研究では、他にどのような着想がユニークと思われましたか。

（岩崎） 「身代わり」、「めぐり」など、予期せぬ難儀に遭遇して、その原因を個々の生を超えた次元での連鎖をもって意味付けされることがありますが、そのような感覚し得ぬものの実在性を覚知することの信仰的意義を問う研究の動向があると感じられますね。

（加藤） 「めぐり」は感覚でき難いためにつかみづらく、研究の題材としては扱いにくいですけれども、このような個人の責任にだけは還元できがたい難儀の根元に迫ることになっています。「めぐり」という言葉で言わんとするのは、なかなか助かりがつかみ難いという状況ですが、しかし、そういうことで難儀の世界に立ち合っている生命のかたちを指し示すことになり、生き難い現実を乗り越えていこうという跳躍の契機を、そこに見ることができる。こうした地平が研究の課題に

上ってきています。

（司会） 教団史研究では「教祖像の現代化」をテーマとして扱った大林所員の報告がありましたね。

（秦） 通常いわれる教義の現代化は、現代の問題状況に対するわれわれの信仰姿勢を裏付けるような論理を教祖の事蹟解釈から導くことに力点が置かれますけれども、報告では、そのような教義の現代化を批判的に捉え、その現代そのものを超え出ようとする動きが求められなければならないということでした。具体的な事例としては、社会の激動期である昭和モダニズム期における教祖像希求が論じられたのですが、そこに、現代化を行う当事者らの感情を読み解き、生きること、信心することと表現することが相即の関係にあるような教祖究明の態度が解明されていました。

（岩崎） 時代の雰囲気に向けられた感情を「がさがさ」といった擬音語に込められた表現から読み取るなど、信仰者がどう動いて、教祖を求めようとしたのかを見ようとする着想は、面白かったですね。

（加藤） そうですね。報告では、助かりは用意されているのではなくて、信じることで助かりの世界が実現するという指摘がありました。それは、助かりの世界が具体的にどうだということではなく、助かりに生きるという、営む信仰の行為の問題で言われています。教祖と言われるあの人物こそ、その世界を生きていた、と。しかし今は、教祖が信仰の原点として当然視され、そこから助かりの世界については縷々述べられてきています。けれども、それではわれわれにとっていかなる存在が、教祖だったのかは見逃されている。教祖以前のところから教祖が生成されていく条件を見失ったまま、既成の教祖像に満足しているだけのことになるでしょう。「教祖伝」についても、集大成ではなく、教祖を希求する再出発点と考えるべきでしょう。

（高橋） 他にも研究報告では、参拝、神名書付、広前、信心の伝播経路、信徒の信仰体験、戦没者慰霊などのテーマが設定されていました。これらの動きは、教祖伝を手元に置いたわれわれの今が、どういう事象によって新たな信仰世界を肉付けしようとしているかの具体例として見ていきたいですね。教祖とは何かを照らし出そうとする研究意欲の基礎付けがあって、教祖の信仰の可能性と展開相が研究で明らかになる。その意味を一層自覚する要がありそうですね。

（司会） 今日は、「教祖伝刊行と教学研究の今」というテーマを設け、今年度の研究報告を題材に、教学研究が何に向かおうとしているのか、何を明らかにしようとしているのかをめぐって話し合いました。

教学研究について、あまり社会動向を反映していないなどの声が聞かれることもありますが、しかし「自己批判」「自己吟味」という言葉の表面上のイメージでそう受けとめられているふしもあります。こうした意見について、教学研究の側からは、教務施策上の問題設定でしか受けとめられない危険性もあり、あまり意見を述べていませんが、今日のように話し合ってみて、実は研究行為の具体からすれば事実は異なっているというのが実感です。一見、研究の動機には反映されていないようでも、それこそ、実は社会動向そのものによってどれだけ強く社会の問題を研究者が感じとって内面化しているか、それが探究意欲をかき立てさせているのだということもわかります。社会の問題を教学的に引き受けて、教祖に問う問いへと立て直すという研究態度ゆえに、社会動向とは乖離したように受けとめられるのでしょう。

しかし、人間の内部に立ち戻って求めているのは、人間を見舞う抗しがたい現実から乗り越えていく道です。信仰に生きるとは何か、という条件を常に手放さない態度であると言え、改めて教学の働きの大きさを感じさせられています。

さらに教学研究の上に、研鑽と努力を積み重ねていきたいと思います。本日はありがとうございました。

思い出

「一八二箇条に還って」

元所員　河合信一

現在、教会で朝五時からの御祈念を担当させて頂いている。ご神前、ご霊前での拝詞奉唱に続いて、お結界で立教神伝もしくは御神伝と旧教典の一八二箇条から五節ずつくらいを奉読している。これは父である教会長のスタイルをそのまま踏襲したもので、おそらく四〇年来変わっていないのではないだろうか。お結界に置いてある旧教典の冊子には、そのご理解に関わる御伝記のページ数らしきものが鉛筆書きで加えられている。試しに手持ちの縮刷版でたどってみると上手く符合しない。おそらく初版のページ数なのであろう。

振り返ってみると、研究所では教典用語辞典編纂の御用の末席に加えて頂き、編集事務に専念することとなった。諸先輩方の書かれた草稿と教典の出典箇所との照合作業に明け暮れ、その何年間は、内容の理解の程度はさておき、物理的には私が全世界で一番教典に触れさせて頂いていたのではないかと思う。

かつて休暇などで在籍教会に帰ると、これ見よがしに現行教典を携えて、一八二箇条の元になったであろう部分を得意気に紹介し説明していた。しかし、最近では日々の生活の上では一八二箇条で充分なのではないか、むしろ、これでも大変だと思うようになった。研究所で、覚帳、覚書、教祖言行資料などを一通り学ばせて頂いたことにより、初めて一八二箇条の一言一言の意味を分からせて頂いたように思う。

また、お広前の隣の部屋が寝室で、赤ん坊のころから睡眠学習のように一八二箇条が頭の中に入っていたようで、今にして思えば一八二箇条のおかげで新米助手が辞典編纂の事務をなんとかこなすことができたのだと思う。ある用語について教典での用例を検索する際に、コンピューターのデータベースを用いたが、いくらコンピューターでも、人間が入力できない言葉は検索できないし、正確な分、微妙な表現や表記のユレにも対応しにくい。その点、一八二箇条から基本的な語彙を身につけることができていたので、あまり漏れを指摘されずに済んだのだと思う。

一八二箇条を奉読しながら、ふと講座や検討会での場面が浮かんでくることがある。

（山口・室積教会在籍）

思い出

「自分にとって研究所とは・・・」

元事務長　佐藤和貴

私にとって研究所での三年間は、信心の面でも教務の面でも大きく自分の殻を破ってもらったように思う（時に破れすぎて周りに迷惑をかけたこともあったような・・・）

また、それまで研究所は頭のいいエリートの人達の集まりで、自分のような凡人はそうそう近寄れない、何やらおどろおどろしいようなイメージを持っていたが、案外なかに入ってみるとそうでもなく、純でシャイでまじめで、時には大いにアホもでき、自分にはピッタリという感じであった。

同じ霊地で御用していても、外からは実際の研究所の中身は見えてこず、昼間はバレーに夜は酒盛りと一体何をしているのやら・・・、そんな表面的な部分だけで批判めいた事を思っていたが、実際、研究所で御用頂く中で、これほどお道のことを思い、信心を求め金光教を愛し、日々もがき苦しんでいる姿に触れ、なんと凄い集団だ！と、それまでのイメージが変わっていった。

また私は事務職ではあったが、検討会にも出させてもらい、最初は恐いもの知らずで、ずけずけ質問もしていたが、段々とその質問した内容が、いずれ自分に返ってくることがわかった時、何も言えなくなっていた。それでも夜の検討会には一緒に混ぜて頂き、時には、おいしい？ラーメンを求め、夜な夜な福山までドライブした事は忘れがたい思い出である。

それから全職員による研修旅行をはじめ、春のお花見、夏はそうめん流し、そして秋には日頃の家族の労をねぎらうため園遊会が開かれ、家内や子供達も一緒にワイワイがやがやと楽しませてもらった。このようなアットホームな雰囲気の中にも、御用の面では大変厳しく、常に自分の信心を問われる場でもあった。

あれから三年半が経ち、昨年は設立五〇周年を迎え誠に有難い限りであったが、学院との統合の話が出たり、これからの研究所の行方が少し気がかりである。

私自身、教会現場に身をおく中で、天下の明教と言われながらも、世間に金光教がなかなか認知されないもどかしさを感じているように、今後もっと研究所の働きが全教に周知理解されていくことを願わずにはおれない。（佐賀・相知教会長）

研究所と私

「ホームランではなく、バントを！」

助手　秦　修一

入所四年目を迎えた。入所してから三年間、指導所員に「ホームランを打とうとするな」「きっちりバントをしろ」「次につなげろ」と言われ続けてきた。私の研究態度に対しての言葉である。ホームランを狙っているように見えていたらしい。

レポートを書く度、問いと答えのサイズが違っていることが続いた。「本教信心にとっての○○」という、どこかで聞いたような問いを立てたことがある。問いのような言い方ではあるけれど、問いになるのかどうかの見極めもつかないままに、問いを掲げて問うことが可能であると考えていた。しかし、検討会で「それは問いなのか」「答えられる問いなのか」と言われ続けた。「○○の中には、制度、財、教義、何でも入ってしまうけれど、ずるずると他の問いにスライドしかねない。設定した問いを問い続けていくだけの作戦があるのか」という指摘もあった。

「本教信心にとっての○○」という問いについて考えていけば何とか道は開けてくる、となんとなく考えていたということなのだが、なんとなく考えてきたことを認めたくなかったために、振り返りを避けていた。それ故に、何をしようとして何が出来なかったのか、また、何がどこまで出来たのかということも明確にはしてこなかった。そしてまた、似たような問いを立て、同じ様な検討を受けた。「本教信仰にとっての○○」という問いは立てられても、その意味を問うことは、具体的に何をどう取り組むことなのかという点では、自分自身でも曖昧さがあり、説明できていなかった。はっきりしたのは、雰囲気で研究に臨んでいた態度だけだった。

結局、私が問う事のできる問いを設定しなければ、その問いには答えられず、積み重ねになっていかない。自分自身がどの程度のことをできるのか、いま見ている資料の中から、何が言えて何が言えないのか、こうしたことこそ気付かなければならなかったのだ。身の丈に合う問いを立て、その限りで答えていく、この繰り返しを日々積み重ねていくことが必要だと常に教えられていたのだ。気を抜けば、すぐホームランを打つ構えになり、大振りのスイングを始めては空振りしてしまう私だが、着実にバントで研究を積み重ねていきたいと思っている。

（愛媛・日吉教会在籍）

研究所と私

「資料室と資料と私」

主事　中西教幸

資料室ってなんだろう？なにもわからなかった最初の頃は、そんな事を考えるだけの知見もなかった。考える契機と出会ったのは一年くらい経ってからだったろうか。日々黙々と、そして淡々と、複写・紙折り・照合・製本という単純作業を繰り返す。そんな日常に、一抹の不安を覚えていた時だった。「資料室は資料の整理・管理が仕事なんだからしょうがない」そう割り切ってしまえばその通りなのだが、そんな温もりのない言葉で納得するほど単純にはなれなかったし、速くて正確で大量に、コピーや紙折りができるようになったからとて、それがいったい何の力だろうかと、余計にそう思わずにはいられなかった。悶々としつつも資料整理を続け、資料室ってなんだろう？資料ってなんだろう？と闇雲に問い求めていた。結局、今日までその問いは解かれていないのだが、ただ何となく、日々の御用を通して手がかりは掴んでいるように思うのだ。

資料の整理・管理・運用。それは資料室の最たる御用内容であり、それなしに資料室は存立し得ない。しかし、それは第一義ではないということ。肌で感じてきた、資料にまみれ、その膨大な量の未整理資料を憎み、それに関係する直信・先覚諸師を恨んだり、古い資料の埃っぽさにアレルギー反応を起こしてくしゃみをし、手には痒みを生じ声にならない悲鳴を上げたりすること。またある時は、難解なくずし字を解読して書き上げた目録に感動したり、きれいに製本できた資料が妙に愛おしく思えてきたり。登録完了しようものなら、まるで我が子の卒業式のように感慨深い（子供いないけど…）。

そんな感じの経験を積み重ねてきてようやく気付いたのだ。つまり、一人の人間が資料と直接関わり、感情が揺さぶられるという経験をすること。その経験の一つ一つが、資料に生命を与える作用になるのではなかろうか。そして、その資料達が研究に活力を与えていく。そんな営みこそが大切であり、資料室の価値、存在理由、そして「資料室ってなんだろう？」という問いにも、何かしらの解釈を与えてくれるのではないかと思う。そう把握さえしてしまえば、今まで弛緩していた身体や根性にも、少しくらいのやる気は湧いてくるというものである。

（新潟・直江津教会在籍）

平成一七年度研究生入所式

本年度は、佐藤道文（広島・加法）、島田悠香（静岡・北浜松）が研究生を委嘱され、入所式が六日、本所で行われた。委嘱期間は五月六日から九月三〇日までの五ヶ月間である。

入所式では、所長から実習に当たっての願いと激励の言葉（金光教報『天地』平成一七年六月号MOVEMENTに掲載）が贈られた。つづいて研究生の自己紹介と指導所員の発表が行われ、佐藤研究生（二部）には高橋所員、島田研究生（三部）には宮本所員が指導にあたることになった。

佐藤道文さん（27歳）は、丸坊主頭で鋭い眼光というコワモテなのだが、話してみると意外に素直（実は仮面？）。また、ピアノでショパンの「華麗なる大円舞曲」を弾く程の腕前だったとか。趣味はノンフィクション映画の鑑賞で、最近は銃社会アメリカを取り上げたものを見たそうだ。「時代や環境を越えた、教祖様の願いを伝えていきたい」と思いを語った。

学院生の時に本教における取次の重要性について調べたことがあるという**島田悠香**さん（23歳）は、大学では教育学部で数学を専攻していた。一見、おっとりとした風貌にもかかわらず、学生時代はハンドボール部で大活躍したとか。徒歩で五時間歩くことなんてへっちゃらの体力の持ち主。趣味はピアノを弾きながら童謡を歌うことだという。「教祖にできる限り近づくことをしていきたい」と語った。

研究生のこれからの活躍に期待したい。

前列左から３番目佐藤、島田

新任職員紹介

●本所書記（事務室）に就任した**太田信治**さん（福岡・西八幡教会）は、平成一二年四月学院卒業後、教区青年教師会の役員として、また、教区や本部の少年少女会主催のキャンプスタッフとしても活躍していた。趣味は、スポーツ全般で、特にボーリングに関しては趣味を超えて、生き甲斐となっている。「研究所は、文武両道の環境が揃っているので、これからのご霊地での生活に心を躍らせている」と語る。（後列左から三番目）

●本所書記（資料室）に就任した**竹中梢**さん（福岡・中八幡教会）は、高校卒業後、すぐに学院に入学。今年の四月、学院を卒業した。学院在学中に研究所での御用の話を頂き、在籍教会長と相談したところ、「自分が研究所で御用をしたい、したくないに関わらず、そのようになさった神様の御神意を分からせて頂かなければならない」との言葉を頂き、その御神意を分からせて頂くべく入所を決意した。「まだまだ御用を御用として頂ききれていないが、これから頑張っていきたい」との抱負を語る。（前列左端）

研究題目の認定

〈第一部〉

・竹部弘「金光大神における超越の視座」

〈第二部〉

・加藤実「金光大神の信仰における『場』の意味
ー『宮地』選定をめぐる金光大神の態度に注目してー」

・高橋昌之「金光四神研究ーその金光大神観と救済の実際に注目してー」

〈第三部〉

・大林浩治「〈金光教〉のはじまりと教団史への展望ー神と人の縁起世界の背景からー」

・児山真生「明治後期の地域社会における信仰展開の諸相ー在地民が求めた信仰に注目してー」

・宮本和寿「戦後教団における信心体験表明の特徴と意味」

●人事異動●

（平成16年6月1日～平成17年5月31日）

一、職員（教団職員）

○幹事小坂真弓、9月30日付幹事を辞任。○所員児山真生、10月1日付幹事に就任。○第2部兼務第1部長竹部弘、12月19日付第2部長兼務の指名を解く。○所員加藤実、12月20日付部長に就任、第2部長に指名。○助手荒垣寧範、2月25日付休職。○所員小坂真弓、同佐藤武志、主事上野信一、3月22日付辞任。○助手高橋昌之、3月22日付所員に任命。○教師太田信治、3月22日付教団職員に任命され、書記に就任。○教徒竹中梢、5月6日付教団職員に任命され、書記に就任、資料室員に指名。○所員金光和道、4月15日付辞任。

二、研究生

○光本真一、9月30日付委嘱期間満了。○教徒佐藤道文、同島田悠香、5月6日付委嘱。

三、嘱託

○教師金光和道、4月16日付委嘱。

四、研究員

○研究員野中修、同古瀬真一、1月19日付任期満了。○教師金光清治、同橘高真宏、1月20日付委嘱。

五、評議員

○評議員沢田重信、7月31日付任期満了、翌日付再任。

●おめでた●

☆結婚

○助手秦修一は9月29日、寺本美緒子さん（秋田・大曲）と結婚。

発行・印刷　金光教教学研究所
岡山県浅口郡金光町大谷一四四一の三
電　話　（〇八六五）四二―三一一七
ＦＡＸ　（〇八六五）四二―三一一九